

第一章 やまとことば

なぜ、大和言葉なのか

連歌で主に使う言葉は、和語つまり大和言葉です。私達が日頃使っているのは和語・漢語それに外来語(カタカナ語)も混じっていますね。普段は和語であるとか漢語であるとか考えて使ってはいませんが、現代語は特に漢語が多いですね。たとえば「深夜まで起きて手紙を書いた」を和語に直してみますと「夜更けまで起きて文(ふみ)をしたためた」となります。もう一例をあげると「海岸に沿って堤防が建造された」は「渚(又は海辺)に沿って堤が造られた」という具合です。いかがでしょうか、漢語は語調が堅く強い感じがしますね。比べて大和言葉は柔らかく、たおやかな感じがすると思いませんか。

それに俗語といわれる言葉も連歌では使いません。俗語は年月が経つと変わっていきます。だいたい二、三〇年程で入れ替わって使われなくなってしまうようです。今よく聞く言葉に「ヤバイ」があります。ヤバイはもともとは、「身に危険が迫る、「危ない」の意味ですが、今の若い方はヤバイを「困った」の意味にも使っています。一方で、「格好が良い」、「素晴らしい」の意味で使っていますね。ケーキを食べて「これヤバイよ」と言った時は「とても美味しい」という意味ですね。「まずい」と言っているのではないのです。仲間内だけの共通語だったものがあつという間に広まる、このような言葉はまさに時代が生み出したのです。「チョ～(超)」も以前は良く使われていた言葉ですが、近ごろではあまり聞かれなくなってきた気がします。「ヤバイ」もあと何年使われるのだろうかと考えてしまいます。

連歌では、百年たっても千年たっても消えてしまわない言葉を使うのです。この日本という風土のなか長い年月を生き抜いてきた言葉たちです。

百人一首を思い浮かべてみましょう。全部は無理だけど、例えば、持統天皇の「春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山」や僧正遍照の「天つ風雲の通ひ路吹き閉じよをとめの姿しばしとどめむ」は覚えているよ、という方もいらっしゃるでしょう。「春過ぎて…」の歌は奈良時代の終わりに編集された万葉集に載っていますし、「天つ風…」は九一三年頃に作られた古今和歌集に載っています。もう千年以上も前に作られた歌ですが、二十一世紀に生きている私達も親しめる歌ですね。今詠んでいる私達の歌も千年後の人達に読んでもらいたいものです。

連歌と大和言葉

連歌では、天地宇宙の大きなものから身近な小さなことまで、広い範囲に思いを馳せ心を遊ばせて詠みます。それも大多数の(グループ)でやりますので、自分では思いもかけない考え方、いろいろな経験をされた歌が詠まれます。もちろん経験したことだけでなく絵空事(フィクション)でも詠んでいいのです。連歌は大和言葉を覚える絶好の場です。大和言葉は日本独自の文化の基でもあります。多くの言葉を知って言葉の引き出しをたくさん持っていたらいいと思います。普段の生活の中でも、この時は

この言葉、この場面ではあの言葉と自在に使い分けが出来るようになるといいですね。

さて、連歌にはもうひとつ大切な式目(ルール)があります。それについては第一部第三章にくわしく解説されていますが、このルールを覚えるのが大変だと思われるでしょう。例えば野球にもたくさんのルールがあります。これを無視して、三振をしてもアウトにならなくてヒットが出るまで打ち続けることが出来る、なんてことになったら試合が進まなくて、きつうんざりする事でしょう。よく考えられた様々なルールは、物事がなめらかに進み、皆さんが楽しく参加できるための大切な決まり事です。連歌の式目もその通りです。先人の方々が長い歴史をかけて、円滑によりよい連歌が巻けるようにと工夫されてきたものです。たくさんある式目も回を重ねる内に自然に覚え身に付いてくるものです。

「習うより慣れろ」と言うではありませんか。さあ、まず一句詠んでみましょう。

使ってみよう大和言葉

あきつ	とんぼ
あこ	わが子(自分の子を親しんでいう言葉)
あまた	数多く たくさん
いざなふ	さそう 導く 伴う
いさよひ・いざよひ	ぐずぐずためらうこと ためらい 一六夜
いさり	漁をすること 漁火
うまし	立派だ 素晴らしい 満ち足りている
かげ	日や月の光 姿 形 おもかげ
かげろひ	明け方の地平線に見える赤みを帯びた光 陽炎
かはず	かえる かじか
かんばせ	顔 容姿
きざはし	階段
きぬぎぬ	男女が共に寝た翌朝の別れ 離別
くもい	雲のある所 空 天上 雲 離れた所 皇居
こち	東から吹いてくる風
さやか	はっきりしている 明るい 澄んでいる
すだく	集まって騒ぐ 群がる 鳥、虫などが鳴く
たぎつ	水が激しい勢いで流れる 心が騒ぐ
たなごころ・たなうら	手のひら
たまずさ	使者 手紙 消息
ちちろむし	こおろぎ
つきしろ	月がまさに昇ろうとしている東の空が明るくなること
つと	食べ物をわらに包んで持ち運べるようにしたもの みやげ物
つばくら	つばめ
つひ	終わり 最後

つま(夫)	妻から夫を呼ぶ言葉 (妻)夫から妻を呼ぶ言葉
とつくに	外国 異国 古くは畿内以外の国 反語:内つ国
ない	地震
のわき・のわけ	秋 はげしい風 台風
はり	ガラス
ひな	田舎 都から遠い地方
ひねもす	一日中 朝から晩まで ひもすがら 反語:よもすがら
ふみ	手紙 文書 書物
ふらここ	ぶらんこ
まとい・まどい	輪になって座り楽しむこと 団欒 宴会
むつごと	むつまじく語り合う言葉 男女の語らい
ゆかし	心ひかれる 見たい 聞きたい 確かめたい
ゆみはりつき	弓に弦を張ったような月 上弦または下弦の月
よも	東西南北 前後左右 いたるところ
をちこち	あちこち 遠くと近く 将来と現在